



**メイスク・タウリシア** (映画プロデューサー & KOLEKTIF代表) Meiske Taurisia  
 インドネシア映画で初めてベルリン国際映画祭コンペ部門にノミネートされた『動物園からのポストカード』(監督: エドウィン)のプロデューサー。ほか『空を飛びたい盲目のブタ』など、世界の主要映画祭に選ばれる秀作を製作し続ける。パピプタ・フィルムズ代表。ファッション学校と映画学校でも教鞭をとる。2014年に映画制作者と地域上映コミュニティをつなぐ独立配信プラットフォームKOLEKTIFを設立。

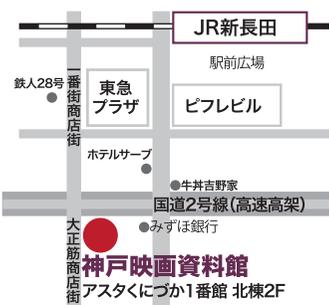


**アドリアン・ジョナサン** (映画ライター、『Cinema Poetica』編集長) Adrian Jonathan  
 2010年より仲間たちとジョグジャカルタで映画評を発表。ポストカードで無料配布する形から、インドネシア映画文化を総合的に評し分析するウェブサイトの運営に展開。映画上映、討論会、批評家ワークショップの主催者。映画リサーチ (KONFIDEN FOUNDATION)、映画祭の作品選定 (Festival Film Solo) なども。2013年、ベルリン映画祭タレント・キャンパスに招待参加(映画批評部門)。

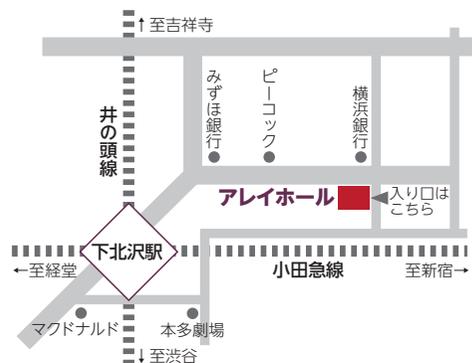


**サリ・モフタン** (映画祭企画、ラインプロデューサー) Sari Mochtan  
 環境や再生エネルギー関係の職を経て、ナン・アハナス監督『囁く砂』『ベンデラー旗一』など多くの製作現場でラインプロデューサーを務める。ジャカルタ国際映画祭で半数以上のイベントを担当する。

**19日** [水]  
**神戸映画資料館**  
 神戸市長田区腕塚町5丁目5番1-201  
 アスタくにつか1 番館北棟2階  
 TEL 078-754-8039  
 JR新長田駅より南へ徒歩5分



**23日** [日]  
**アレイホール**  
 小田急/井の頭線 下北沢駅北口より徒歩2分  
 東京都世田谷区北沢2-24-8 下北沢アレイビル3F



**22日** [土]  
**アテネ・フランセ 4階講堂**  
 東京都千代田区神田駿河台2-11  
 http://www.athenee.jp/  
 TEL 03-3291-4339  
 JR御茶ノ水駅(御茶ノ水橋出口 徒歩7分)  
 JR水道橋駅(東出口 徒歩6分)

**24日** [月/祝]  
**エスパス・ビブリオ**  
 東京都千代田区神田駿河台1-7-10 YK駿河台ビル B1F  
 http://www.superedion.co.jp/  
 TEL 03-6821-5703  
 JR御茶ノ水駅(御茶ノ水橋出口 徒歩5分)



## 独立映画鍋では随時メンバーを募集しています!



年会費 個人 4,000円 団体 20,000円 ※入会金はありませぬ

NPO独立映画鍋は、多様な映画を支え育むための互助会です。年間を通して新メンバーを募集しています。映画を作る人、上映する人、見る人まで、誰でもメンバーになれます。普段の自分の活動領域を越えた、横断的なネットワークに関わってみませんか。独立映画の製作と上映活動に携わる人々、それを取り巻く環境をサポートするシステムを、独立映画鍋と一緒に作りましょう。

入会申し込みは公式サイトより → <http://eiganabe.net>

# 映画上映者の国際交流!

## 日本・インドネシア編



# 映画の仲間が、作る人・見る人と集う

## 上映とトークイベント

インドネシアでインディペンデント映画の製作や上映をしているゲストを迎え、日本の作り手、上映者、観客と出会う1+3日間

- 2014年
- 11月 **19日** [水] 神戸映画資料館 (神戸) 上映&トーク 上映者と作り手の幸福な連携
  - 11月 **22日** [土] アテネ・フランセ 4階講堂 (神田駿河台) 上映&ワークショップ 上映は未知との遭遇だ! ①
  - 11月 **23日** [日] アレイホール (下北沢) シンポジウム いろいろな映画の上映振興のために
  - 11月 **24日** [月/祝] エスパス・ビブリオ (神田駿河台) 上映 上映は未知との遭遇だ! ②

本プログラムは「多様な映画の観客育成プロジェクト(日本・インドネシア編)」の一環として開催されます。  
 主催: ドキュメンタリー・ドリームセンター、NPO法人独立映画鍋、KOLEKTIF  
 後援: 在日インドネシア共和国大使館  
 協力: 神戸映画資料館、Planet+1、名古屋シネマテーク、アレイホール、アテネ・フランセ文化センター、エスパス・ビブリオ、大阪アジア映画祭、東京国際映画祭、Jogja NETPAC Asian Film Festival、Festival Film Dokumenter Yogyakarta  
 協賛: スカパーJSAT株式会社、ガルーダ・インドネシア航空会社、キーコーヒー株式会社、Tembu Rumah Budaya  
 助成: アーツカウンシル東京(公益財団法人 東京都歴史文化財団) 国際交流基金アジアセンター

お問い合わせ ▶ 独立映画鍋 TEL: 070-5664-8490 (11:00-18:00)  
 Email: doc.dream.center@gmail.com  
<http://eiganabe.net/indonesia/>



街なか、ネット、スマホ…。映像があふれる今こそ、暗闇の中で大スクリーンに向かう映画体験は、かけがえない特別なものです。日本では80年代から主要都市のミニシアターで世界の映画、個人映画、名作クラシック、ドキュメンタリー映画のような多様な映画が上映されてきました。インドネシアでは、国際映画祭で評判の作品を各地域で巡回上映する活動が始まったところ。

今回、インドネシアでインディペンデント映画の製作や上映をしているゲストを迎え、日本の作り手、上映者、観客と出会う数日間を企画しました。インドネシア映画と日本映画を並べて見て語り合い、両国の映画環境について共通の課題を探りながら交流する事業に、ぜひご参加ください。

## 11月 19日 [水] 神戸映画資料館 (神戸)

### 上映&トーク 上映者と作り手の幸福な連携

創作の拠点に神戸を選んだ濱口竜介監督に、地域と上映コミュニティの意味を聞く

### 17:00— エドウィン短編集 Edwin's shorts

(2002—2008 / インドネシア / DVカム / 43分)

監督：エドウィン Edwin

カンヌ映画祭・監督週間の初インドネシア短編『木の娘・カラ』を含む、エドウィン監督の多彩な初期短編。『ゆっくりな朝食』『犬と結婚した女』『とても



退屈な会話』『傷にまつわる話』『フラフープ・サウンディング』。斬新でタブーに挑む作品群は、インドネシア本国ではどんな風に乗映されているのだろうか？ (協力：大阪アジア映画祭)

### 18:00— 不気味なもの肌に触れる

*Touching the Skin of Eeriness*

(2013 / 日本 / Blu-ray / 54分 / 出演：染谷将太、渡川清彦、石田法嗣 他)

監督：濱口竜介 Hamaguchi Ryusuke

東京藝大在籍中の『PASSION』、東日本大震災で津波被害を受けた人々の「対話」を撮った『なみのおと』ほか東北記録映画三部作(共同監督：酒井耕)など、国内外で高い評価を受ける濱口監督。「即興演技ワークショップin Kobe」など商業性にとらわれない異色の創作活動を続ける。本作は豪華なキャストを迎え、不穏な人間模様を描く。



### 19:00— 20:30 トーク

ゲスト：濱口竜介(映画監督)、田中範子(神戸映画資料館支配人)

インドネシアの皆さん

アート系上映館の多い神戸に活動拠点を移した濱口監督に、インドネシアの上映者たちが話を聞く。作り手にとって地域とのコラボ、上映者の存在とは？

入場料金：1,000円(全プログラム通し)

## 22日 [土] アテネ・フランセ 4階講堂 (神田駿河台)

### 上映&ワークショップ 上映は未知との遭遇だ! ①

インドネシアと日本のインディペンデント映画を上映し、作り手と「映画製作の出口」について語り合う

### 11:30— 13:00 ★上映後トーク：メイスク・タウリシア(プロデューサー)

#### 空を飛ぶたい盲目のブタ

*Blind Pig Who Wants to Fly [Babi Buta Yang Ingin Terbang]*

(2008 / インドネシア / Blu-Ray / 77分 / 出演：ジョコ・アンワール 他)

監督：エドウィン Edwin

ベルリン映画祭コンペ部門にインドネシア映画で初めて選ばれた『動物園からのポストカード』監督の長編第1作。バドミントン、ブタ、ゲイのカップル、キリスト教のテレビ番組。パンに爆竹をはさんでくわえる少女リンダ、スティービー・ワンダーを熱唱しながら治療する盲目の歯科医。差別されてきたインドネシア華人の姿が、シュールなイメージの連続から浮かびあがる。



### 13:30— 15:30 ★上映後トーク：土屋豊(監督)

#### 隕石とインポテンツ

*Meteorite and Impotence*

(2013 / 日本 / Blu-Ray / 10分 / 出演：筑波竜一、野本かりあ 他)

監督：佐々木想 Sasaki Omoi

滞空を続ける超巨大隕石の脅威下、EDに悩む夫婦を描く短編映画。カンヌ国際映画祭短編コンペ部門で上映。



#### タリウム少女の毒殺日記

*GFP Bunny*

(2012 / 日本 / Blu-Ray / 82分 / 出演：倉持由香、渡辺真起子 他)

監督：土屋豊 Tsuchiya Yutaka

蟻やハムスター、金魚など、生物を観察・解剖し、その様子を動画日記としてYouTubeにアップすることの好きな高校生。彼女は動物だけでなく、アンチエイジングに明け暮れる母親までも実験対象とし、毒薬タリウムを少しずつ投与していく…。そして学校で壮絶なイジメにあう自分自身をも、一つの観察対象として冷徹なまなざしで観察していた。



### 16:00— 17:15 ラブリー・マン

*Lovely Man*

(2011 / インドネシア / Blu-ray / 72分 / 出演：ドニー・ダマラ 他)

監督：テディ・ソエリアアットマジャ Teddy Soeriaatmadja

田舎のイスラム家庭育ちの少女が、生き別れた父親を捜すためジャカルタへ。ようやく見つけた父親は、女装して街角に立つ男娼に成り果てていた……。CMやミュージックビデオも手がける気鋭の監督の真摯なまなざしと主演ふたりの繊細な演技が光る。(協力：大阪アジア映画祭)



### 17:30— 19:00 ワークショップ 「映画体験は世界を広げる?」 ワークショップのみ入場無料

インディペンデント映画は驚きに満ちている。その未知との遭遇が新しい価値の発見(「おもしろかった!」)になれば、世界は広がるが…。この日に見た上映作品を元に、映画体験を改めて考える。身内や地域に向けて上映するならば、自分は作品と観客のどういう出会いをクリエイトする?

入場料金(各回入替制)：一般▶一回1,200円/一日通し券2,500円 | 大学生・専門学校生▶一回800円 | 高校生以下▶無料

## アレイホール (下北沢)

シンポジウム

## いろいろな映画の上映振興のために

インドネシア人の眼から日本の上映環境を見る、考える

15:00—17:00 トークゲスト：深田晃司(映画監督『ほとりの朔子』)、石川翔平(ポレポレ東中野)

インドネシアの皆さん

司会：藤岡朝子(ドキュメンタリー・ドリームセンター代表)

関西、名古屋のミニシアター視察を終えたインドネシア上映者たちの感想を聞き、日本の地方都市での映画上映の実態を考える。映画上映の公共的な役割は？映画体験の地域格差をどう解消できるか？インディペンデント映画が製作と上映の自律的サイクルによって存続していくには？など会場を交えて深める。

入場料金：一般800円(映画鍋メンバー▶無料)



## 23日 [日]

## 24日 [月/祝] エスペース・ビブリオ (神田駿河台)

### 上映は未知との遭遇だ! ②

11:00— 13:00 ★上映後トーク

#### 愛を語るときに、語らないこと

*What They Don't Talk About When They Talk About Love*

*[Yang Tidak Dibicarakan Ketika Membicarakan Cinta]*

(2013 / インドネシア / 104分 / 出演：カリナ・サリム 他)

監督：モーリー・スルヤ Mouly Surya

目の不自由な20歳の少女フィットリは聴覚障害のエドに想いを寄せている。極度の近視のディアナは、事故で失明したアンディが好きなのだが…。寄宿舎制の盲学校を舞台にした青春群像ファンタジー。新鋭女性監督の第2作。(協力：東京国際映画祭)



14:00— 15:30 ★上映後トーク：森元修一(監督)

#### 大津波のあとに

*Lives After the Tsunami*

(2011 / 日本 / Blu-ray / 74分 / ドキュメンタリー)

監督：森元修一 Morimoto Shuichi

2011年3月11日の12日後。仙台市や石巻市に入った監督が見たままの風景、出会った人々の声そのままを、ナレーションも音楽も使わずに克明に伝える。監督の戸惑いと混乱ぶりが当時の被災地の極限状況を感じさせる。報道ではないカメラを持った個人の映像は、作り手本人の手でその後広く自主上映された。



16:00— 18:00 ★上映後トーク

#### 目隠し

*The Blindfold [Mata Tertutup]*

(2011 / インドネシア / DVD / 99分 / 出演：エカ・ヌサ・フルティウィ 他)

監督：ガリン・ヌグロホ Garin Nugroho

イスラム原理主義集団に拉致される少女アイニ。自爆テロによる自己犠牲の意義を信じるようになるジャベル。社会不安と貧困を背景に、過激派組織が若者を罠に陥れる。独裁政権下の90年代から映画づくりを続ける監督が、インドネシアの現状に触発され取材した実話をもとに描く。(協力：東京国際映画祭)

